
天使・ランティス

山の麓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使・ランティス

【Nコード】

N6966P

【作者名】

山の麓

【あらすじ】

あるところに、ランティスという人間の娘が祖父と暮らしておりました。

ある日、彼女の前にジクという名の天使が現れて、彼女は願いをかなえるべく、天使になるのですが……？

彼女は、両親に会えるのでしょうか？

追伸 一番最初に二話が出来ていて、二番目に一話が出来ています。こ

注意してください。

? 天使様(前書き)

やっと、第二話です。

ジクは天使のくせになぜか全身真っ黒です。

？ 天使様

「え！本当に出たのかい？」

ランテイスには驚く祖父の声は届かなかった。

「フフフ…悪霊退散って初めてだけど、成功するかしら…フフ…きつと成功するわよね。こないだメイカ おばさんに悪霊退散の仕方、教えてもらったし…」

不気味に笑みをこぼしながら笑う孫に、祖父は何も言えなかった。

「工房に行ってくるね…今新しく机を作ってるんだ」

仕事は引退したものの、祖父は大工のころと変わらず家具を作り続けている。

「うふふ…行ってらっしゃい……………」

いつもは笑顔でお見送りしてくれる孫がとうとう壊れてしまったかと、祖父は心配しながらもパンを一つつかんで家を出て行った。

孫が作っていたスーブラしきものは、作りかけというのに、すでに見た目が危険だった。匂いも、いつもとは全然違った。あれを一口でも口に入れたら死ぬだろうと思ってパンしか持ってきていない。

家を出て、少し歩いた時、ふと後ろを振り返った時、彼にはある記憶が蘇った。まさか。

家に戻ろうかとも思ったが、違ったら恥ずかしいと思い、また工房へと歩き始めた。

「ウフフフフ…そうよ、あれは悪霊よ…退治するべきだわ」

いままで、お化けや幽霊などの非現実的なものはいないと信じていたランティスにとって、あの男は相当な衝撃を与えていたようだ。

「やっぱり、塩かしら…でも塩もつたいないし…あ、護符でも張るときましようか」

「おいおい…勝手に悪霊扱いするの、やめてくれねーか？」

さっき聞いた声が今度は横から上がった。ランティスは半泣きになりながら叫んだ。

「いやあああああ！出たあ、悪霊ー！！！」

それに軽くあきれた様子で男は答えた。

「ランティス、落ち着け。俺は悪霊じゃない。天使だ。」

「は？天使??」

首をかしげるランティスに、男は自信満々に答えた。

「ああ。俺は天使の一人だ。名はジク。よろしくな」

しばらくして、ランティスは大笑いした。

「あはははっ 天使ですって！あなた冗談にももつと良いのがあるでしょう？いまどき天使って…ははっ」

その大笑いに、ジークは冷静に答えた。

「冗談ではない。事実だ。」

「そんなわけないでしょ！現実見なさいよっ」

そんなことがあってたまるか。と、ランティスは精一杯叫んだ。

しかし帰ってくるのは落ち着いた声であった。

「…現実を見ているが？」

「

」

もう、返す言葉が見当たらない。どうしよう、このままこの非現実的な人を認めるしかないのか？

必死で頭を回転させると、この男にないものがあることが発覚した。

「ね、あなた、天使なのよね？」

「ああ。どうかしたか？」

「でもあなたには翼がないわ。神様のもとへ行くための大きな翼が。」

「
少し自信があつたのだが、男はさっきまでと同様、いたってあっさりと答えるのであつた。」

「翼は、しまつてある。いつもあつたら邪魔だろう?。」

「ど、どこにしまつてるのよ??。」

「あ、それは秘密だ。」

「ちよつ…教えてくれてもいいじゃない!!!。」

叫ぶランティスに、ジクは首を振つた。

「これはいかん。天使の秘密をすべて明かすことになってしまうからな。」

「天使の秘密…?。」

「ああ。人間が知つてはいけないことだ。ということだから、絶対に聞くなよ。」

その時のジクの瞳には、強い意志が宿っているように見えた。納得するしかなさそうだ。

「…うん。わかつた。」

納得したランティスを見て、ジクは静かに言った。

「今日お前に会いに来たのは、お前に手伝ってほしいことがあるからだ。」

？ お化けが出た！（前書き）

第一話です。

ランティス、って名前、打ちにくくてただいま苦戦中であります。

？ お化けが出た！

王都からずいぶん北にある、小さな村。そこに、ランティスという名の娘が住んでいた。

彼女に両親はなく、祖父との二人暮らしだったが明るい性格で村の人々とも馴染んでいた。

「おはようございます」

彼女の一日は、この一言から始まる。

最初は祖父、次は近所のおばさま連中に、馬たちに、そして、子供たちである。

朝、彼女はいつものように早起きし、朝食を作り台所へ行く。井戸から何往復もして水を汲んでくるのも、過酷な畑仕事にも弱音を一つも吐かずやり遂げるのを村人はいつも感心していた。

だって、おじいちゃん忙しいもの。

祖父は元大工でもあり、よく町に新人をしごきに行くため、何日も家を空けることが多かった。そのため、家のことはすべてできるようになった。

それも含めて彼女は誠に出来た娘だったため、隣の村からも求婚する若者が絶えなかったが、祖父が言わなかったため、彼女が知ることはなかった。

「はあゝあ」

彼女はいつもと同じように、朝起きるとあくびを一回して、むくりと起き上がる。

祖父手作りのベットは、小さいころから使っているため、少し小さい。

立ちあがって、部屋中を見ると、ふと机の上に置いてある絵が視界に入った。

木彫りの額に入ったそれには、幸せそうな男女の絵が入っていた。

二人は、まだ三つぐらいの女の子を抱いて、笑っていた。それは、幼いころの自分と、父、母が家族である山に行った時のものらしい。

自分には、この絵の幸せそうに笑う二人が母と父、というようには思えなかった。

まず自分には、母の顔も父の顔も記憶にある気がしない。しまった！いつもならもう朝食を作っているころだ。

急いで台所に行こうとした時、後ろから声がした。

「おはよう。え〜っと…ランティス、だっけ…」

後ろを振り返ると、全身が真っ黒の男が立っていた。明らかに変な人だ。

「お前、両親に会いたくないか？」

急に変な格好をした男が現れて、記憶にも残っていない両親に会わせてやるといわれても、そう簡単に答えることができるものは少ないだろう。少なくともランティスには答えられなかった。

「おはよう、ランティス。どうしたんだい？お化けでも見たような顔してるけど??」

起きてきた祖父に話しかけられたランティスはハツとした。

「そつだ！お化けなんだわ！きつとそつよ！」

？ 天使からの願い（前書き）

第三話です。

今回、全然進展がなかったです。

次話、頑張ります。

？ 天使からの願い

「私に、手伝ってほしいこと…？」

問うと、ジクはうなずいた。

「お前にしか、できないんだ。頼む。」

「私にしかできない……」

私にしかできないこととは一体、何だろう？
私が今までやったことと言えば、誰かに教えてもらったことばかりだ。

「そんなこと、ないわ」

そう考えると声にも自信が少しくなった。

「いや、あるんだ。」

ジクは私の知らない何かを知ってるみたいだった。

「お前は生まれつき、強力な『力』を持っている。本来なら人間を巻き込みたくはないのだが、今回は頼るしかないのだ。お前の『力』に。」

「私の、『力』？」

首をかしげた私に、ジクは真剣に語った。

「たまに、いるのだ。我々天使と同じような『力』を持った人間がほとんどは並の人間と同じような暮らしをしていく。だが、そんな人間の中でも稀に我々よりも強大な『力』をもった者がいる。そういう人間は、我々に力を貸してもらうのだ。我々は常に、人々の幸せを願っている。だが…」

「だが…？」

「何年かに一度、天使が多く死ぬ年があるんだ。天使は人々の願いをかなえるためにいるからな。数が減ると人々の願いはあまりかなえられない。天使も忙しいんだ。その時に、天使と同じような『力』を持った人間に手伝ってもらっているのだ。」

「人間が、手伝うの？」

「ああ。そして今年は天使が減ってきている。若い天使も死ぬのが増えてきた。そこで我々は『力』を持った人間を探し始めた。早めに探しとけば後々楽だからな。元気な天使たちは各地に探しに行った。俺もその一人、というわけだ」

「私にも、『力』があるというの？」

恐る恐るにしか聞けなかった。

ジクはそんな私を見て、頷いただけだった。

「私にも、手伝えと？」

「ああ。お前の『力』は強力だからな。無理やりにも手伝っても

らうぞ。」

ランティスは、自分に出れることなら協力したいと思った。

「わかったわ。お手伝いさせてもらうわ。私にできることなら、だ
けど」

するとジクは、待っていたというように言った。

「その言葉を待っていた。さすがあの人の娘だ。」

「あの人…?」

あの人、とは一体誰のことなのか？

ジクは焦ったように言ってきた。

「な、何でもない。気にするな。ほ、本題に入るぞ。」

「うん。」

? 『スーズ』(前書き)

第四話です。

? 『スーズ』

「何回も言ってるが、天使は、人々の願いをかなえるためにいるんだ。」

「うん」

「俺たちは、願いを実現させるために、『スーズ』というのを使うんだ。」

「『スーズ』?」

「まあ、一種の魔法みたいなもんだ。天使によって違うが、皆、動物や物の形をしている。」

そういって、ジクは右手で左手の甲に指で何かを書いた。

すると、ジクの左手から青白く光って何かが飛び出してきた。

「わぁ……」

「俺の場合は、長剣だ。ま、俺ぐらいの力量になると、二種類になる。変化ができるようになるんだ。」

そう言ってジクは左手の甲にもう一回何かを書いた。

すると今度は動物が出てきた。と、ほぼ同時に剣は消えてしまったが。

「と…虎？」

あまりにも大かったため、ランティスは驚いた。

「俺の場合は、だが。お前もやってみるか？」

興味身心に虎を見ていたから、やりたいと思っ
たのだらう。まあ、少しはやってみたいという気持ちもあったから、
否定はしないが。

「うん。どうやるの？」

「まずは、自己紹介だな。なにか書くものないか？」

自己紹介？一体誰に??

疑問は消えなかったが、とりあえず従うことにした。

「名前はランティス、女、十五歳、身長***?、祖父と二人暮らし、幼いころの記憶なしっ」と…

用意した紙に、ジクは次々とランティスのプロフィールを書いていく。

「ねえ、こんなの書いて、何に使うの？」

気になって仕方がなかった。我慢していたが、とうとう耐えきれなくなった。

「これで、お前に合った『スーズ』を見つかるんだ。」

私に合った『スーズ』？

声には出さなかったのだが、ジクは聞こえたかのように言った。

「そう。好みや性格って人それぞれ違うように、『スーズ』もみんな違うんだ。だから、自分に合った『スーズ』を見つけて、契約する必要があるんだ。」

「へえ…契約って？」

「まあ、『スーズ』を呼び出せば契約が完了したことになる。向こうは嫌なら来ないからな」

あまりにもさっぱりと言われた為、もし来てくれなかったらどうなるのか、という不安がよぎった。

「よしできた。これでいい。両手を広げて。」

書けたらしく、彼はその紙を私の両手にのせた。

すると、紙から青白い炎がでてきて、やがて紙は燃え尽きた。だが、不思議なことに熱いと感じることはなかった。

燃え尽きた紙のくずから、またまた青白いものが出てきた。今度は炎ではなく、雌鹿だった。

「きれい…」

その雌鹿がとても美しかったため、しばらく見入ってしまった。

「これが、おまえの『スーズ』だ。」

ジクに言われ、ランティスはますます見入ってしまった。

「なんてきれいな雌鹿なの……………」

「ああ。さすがだな。そうだ、これをやる。」

ジクはあの真っ黒な服の胸元にあるポケットから、ペンダントを取りだして渡してきた。よく見ると、クローバーの飾りが付いている。

「なにこれ……」

？ 母の秘密（前書き）

第五話です。

? 母の秘密

「これは、『スーズ』と契約した人間が持つペンダントだ。これがないと『スーズ』の力は借りれないからな。常に持っているといいだろう。」

そうやって彼は右手で左手の甲をなでた。すると彼の『スーズ』である虎が消えた。

どうやら、『スーズ』をしまう時の方法らしい。

ランティスも同じように左手の甲をなでると、雌鹿も消えた。

「わかったわ」

早速首に付けて答えた。ジクは付け足すように言ってきた。

「それから」

「まだあるの?」

もうすでに覚えることだらけで頭はパンパンだ。まだあると聞くだけで目眩がしてきそつだ。

「これで最後だ。絶対にこのことは他言してはならない。いいな? じゃないと俺の首が飛ぶ。」

あ…そうなの…よほど自分の首が大事なのね……

ランティスはもう、突っ込むしかできなかった。かろうじて声は出さなかったのに、聞こえたようなそぶりでジクは言ってきた。

「当たり前だ。人間とは違って、天使は本物の首が飛ぶからな。お前も気をつけた方がいい。」

「あ…本物の首……」

天使の世界って厳しいのね、と、思わざるを得ない一言だった。

ランティスには構わずジクは続けた。

「よし。今日からしばらくは仕事してもらおうことになる。家を空けると祖父に伝えておいた方がいいと思うぞ。早く行って来い。」

「うん！」

さつき祖父は工房に行くと言っていた。帰りはいろんなところに寄り道しながら帰ってくる祖父なので、帰る時間帯はどこにいるかわからないが、今ならまだ工房にいる時間だろう。

猛ダツシュで工房へと駆けて行った。工房は、村の外、北側にあたるところにある大きな森の中にある。

森の奥の方は危険なので入り口付近に立っている。が、村の門を出てからしか行けないため、遠いと言えば遠いのだ。

だって、ランティスが住むこの家は、門から一番遠いからだ。

それでもがんばって走っていくと、やっとの思いで門のところまで

これた。

「畑が多いのよ！この村は！」

思わず叫んでしまった。

この村は、ほかの村よりも農業がさかえているため、田畑は広いのだ。

まあ、そのおかげで他の村よりは裕福な生活ができるのだが。

「ふう。もうちょっと…」

そう言ってランティスはまた走り始めた。

一方、祖父はまだ工房に行っていないかった。

今いるのは、左隣の隣の家に住む友人、サリアの家だ。

彼女は娘と孫の三人暮らしで、娘は畑に出かけていたため、孫が二人にお茶を入れに行った。

「　　というわけで。どう思う、サリアちゃん。」

孫がおかしかったため、壊れたのかどうか、サリアに相談に乗ってもらいに来たのである。

「どう思うって言われても、私にはわからないわ」

ダンカン、サリアの、いつまでたっても変わらない、このさっぱりとした話し方が好きだ。

「もしかしたら、あれかも知れん…」

「まあ、アイビスがそうだったものね」

二人はお茶を机の各前に置いて座っていた、同席していたサリアの孫、ミリナのことなど全く気にせず話していた。

そのためミリナには、なにがなんだかさっぱりわからなかった。

「あの…」

「どうかした、ミリナ？」

恐る恐る口を開くと、祖母が何事かと尋ねてきた。

「あの、『あれ』って、何ですか？」

「『あれ』か？それはな」

ランティスの祖父、ダンカンはいたって気楽に答えようとした。が。

「ダンカン！」

瞬時にサリアが叫んだ。ダンカンは、忘れていたとでもいうような口ぶりでミリナに言った。

「あ…内緒だったな。すまんのう、ミリナちゃん。これは教えれん。」

ミリナにはさっぱりわからなかったが、一応謝っておくことにした。

「はい…。変なこと聞いて、ごめんなさい。」

するとダンカンは、むう、というような顔で言ってきた。

「そうじゃのう。絶対に、他言しないと、誓えるなら…」

「ダンカン！ミリナにまで言うつもりか！！」

叫んだサリアに、まあまあ、と言ってダンカンは続けた。

「少しぐらいは教えてあげよう。どうだね？」

「はい！約束します！」

ミリナはランティスより少し年上で、よく面倒を見ていた。そのため、ダンカンはよくお礼と言って、色々な事を教えてくれた。

「まったく…私は知らないわよ、どうなっても。」

「わし一人の首が飛ぶくらい、どうでもいいわい。」

サリアの言葉に軽く答えてから、ダンカンはミリナの方へ向いた。

「『あれ』とはな、天使のことだ。ランティスの母は天使なんじゃ

よ。」

ダンカンの言葉に、ミリナはなんにも言えなかった。

？ 秘密（前書き）

第六話です。

？ 秘密

ミリナは言葉を失った。

「天使：？アイビスさんが？」

あまり記憶には残っていないものの、まだランティスが生まれて間もなかったところに遊んでもらった記憶がある。物凄く楽しかったため、ずっと覚えているのだ。

記憶の中のアイビスは、黄金の髪に、同じ色の瞳がとても美しく、しかし、容姿とは異なり、とても元気で、一緒に走った記憶もある。

「たしかに、とてもきれいな方でしたけれど…」

「うむ。ほんとに美人だったよなあ。なんでフレッドの嫁になんかになってくれたんだろうか…」

ダンカンも付け足すように言った。

確かにそう思う。

美しかったけれど、天使なんて、本当にいるのだろうか？

疑問に思いながらも、祖母を見た。

祖母が窓の外を見ながら、そこを通じて何かを見ているようだった。

なにかあるのかとみても、田畑が広がっているだけだ。

「おばあちゃん？」

祖母の瞳には、確信が満ちていた。

「…本当に、いるんだよ。天使様っていうのは。」

祖母は視線は動かさず、少し険しい声になって話し始めた。

「あれは、本当に、奇跡に近い出会いだったさ。」

「ほんとにのう。アイビスがいなかったらこのダンカン、とうの昔に死んでいたからな。」

祖母の言葉にダンカンはありがたいように言い加えた。

「え？なぜです？」

その問いに、ダンカンは半泣きで答えた。

「彼女がおらんかったら、息子には嫁もおらず、未来は真っ暗だった。わしは苦しむ息子を見たくないから、飛び降り自殺をするところだったんだ。」

……………もう、何とも言えない。

祖母の言葉は続く。

「私もさ、あの娘には助けられたよ。本当に。彼女は幸運を呼ぶ天使様だったね。」

少しの間、沈黙が落ちた。

その沈黙を破ったのは、三人がいる部屋の横、玄関の扉の音だった。

? 話(前書き)

第七話です。

今回あんまり進展なしです。

すいません*

？ 話

「おじやまします、サリアさん、おじいちゃんしりませんか！？工房にいないんです！！」

大きな扉の音とともに入ってきたランティスは部屋に入るなり驚いた。探していた祖父がいる。

「おじいちゃん！工房にいなかったから何処に行っちゃったのかなって、探したんだよ！」

そう叫ぶなり、部屋を見渡すと、そこには祖父と、サリア、そしてミリナがいた。よく三人で話しているのを（ミリナは無理やり付き合わされているのだが。）ランティスは知っている。

しかし、今、ここに広がる空気はいつもの明るい空気とはま逆の、重たい空気だった。

「三人とも、なにかあったの？なに、この重たい空気は。」

思わず聞いてしまった。それぐらい、部屋の空気は重たかったのだ。

お前の母親の話をしていたんだよ、なんて言ったら、ランティスはすべてを知ろうとするから、絶対に言えない。

「ラ、ランティス、なにかあったのかい？」

ダンカンは、高ぶる心臓を落ち着けながら言った。

孫が工房まで来るのは珍しい。それに、いなかったからここに真っ先に来る、というのは、今何としても会いたかった、ということになる。何事だ？

「うん！急だけど、私、これからしばらく家を空けるわ！お留守番をお願いします！」

ダンカンはずばらくの沈黙のうち、飲んでいたお茶をブホッと吐き出した。

「な…なんといった？」

「だ、か、ら、しばらく家を空けるからお留守番よろしくお願いします。まずって言ったの！」

どうやら、聞き間違いじゃなかったらしい。

少しの間あと、ダンカンはうう…というように言った。

「ランティスが堂々と家出宣言をするなんて…おじいちゃんはさみしいぞ…」

「家出じゃないって！しばらく家を空けるだけよ！安心してね。おじいちゃんがさみしくないように、これあげるから！！」

家出宣言と間違えられたため、少し強めに言った。

そして、祖父に、銀のロケットを取り出して渡した。

「これを私だと思って、乗り切って」

祖父は困った。そのロケットは、アイビスが天より落ちた時、持っていたものだ。

アイビスがとても大切にしていたものだから、アイビスがいなくなつた後も大切に取っておいたのだ。

まあ、ランティスが四つの時、欲しい欲しいとねだつたため、今の今までランティスが持っていたが。

「ランティス…これはお前の宝物だろう？大切に持っていなさい。」

「でもおじいちゃん…」

ランティスは詰まった。それをみて、ふっと笑って祖父は続けた。優しい子に育ってくれた。

「おじいちゃんはいいさ。それより、このロケットは、絶対に落とすんじゃない。常に肌身離さずつけていること。いいね？」

祖父の瞳には、懐かしいような困っているような、そんな感じのが浮かんでいる。

その瞳を見て、ランティスは、祖父を困らせてしまったと思い、祖父も言葉にうなずいた。

「うん。私ずっとつけるわ。ありがとっ、おじいちゃん」

そんな孫の言葉を聞いて、ダンカンが微笑んだ。

「ああ。きつと喜んでるだろうよ、あの娘【こ】も。大切になさい。」

「あの娘って、誰のこと？」

孫にそう聞かれ、ダンカンは、うつ、と心なかで言った。答えに迷っている、ランティスと反対の方から視線を感じた。

「サ…サリアちゃん…ど、どうやって」

助けを求めたのに、返ってきたのはとても冷たい言葉だった。

「あなたのせいなんだから、自分でなんとかなさい。もう用はないでしょ、帰った帰った。」

すると、ダンカンからではなく、ランティスから返ってきた。

「サリアさんもご存じですか？」

もちろん知っているが、ここで頷けば絶対に聞かれる。答えられないなんて、言えるわけもなく、

「私には、何のことやら。ダンカンの昔の愛人とかじゃないかしら？」

誤魔化した。その言葉にランティスは激しく動揺した。

「お…おじいちゃんにあ…愛人…がいたなんて…」

記憶の限りでは、祖父が祖母以外の女の人と付き合ってたなんて言

う話すら聞いたことがない。でもそれは、まだ私が子供だったからなのかもしれない。

「ど…どんな女性【ひと】ですか？」

サリアは適当に答えた。

「そうねえ…アイビスっていうとっても美人な…」

ランティスは興味身心である。

「サリア！」

サリアが言い終える前にダンカンが叫んだ。これ以上余計なことを吹き込まれてはたまらない。

いつもはおっとりとしているダンカンが急に叫んだので、サリアは驚いた。

「もう、遊ぶのはよしてくれ。ランティス、帰ろつ。ミリナちゃん、邪魔したね。」

サリアではなく、黙って全てを見ていたミリナに告げると、ランティスを連れて家を出た。

「良いかい、ランティス。これ以上、なにも知らないでくれ。お前はなにも、知らなくていいんだ。」

家を出るなりダンカンは孫に訴えた。

「なんでよ。私だってもう大人よ！どうして教えてくれないの？」

祖父は何かを隠している。なぜ自分には教えてくれないのか。

「そんなに内緒にしたいの？『アイビス』っていう人のこと。」

祖父にはなんて答えていいか、わからなかった。

そのころ、サリアはいまだに驚いていた。

「今まで私を呼び捨てにしたこともないのに…怒鳴ってくるなんて…」

ブツブツと何かを呟く祖母に、ミリナは困った。話を聞いてくれる状況ではなさそうだ。

それでも、言っておこうと、聞いてるかもわからない祖母にミリナは言った。

「おばあちゃん、私畑に行ってきます。お母さん、心配ですから。」

今頃母は畑仕事を中断して一休みしているころだろう。

何か食べるものを持っていこうと思って、今朝焼いたばかりのベリ―パイをバスケットに入れた。

「あと、あれでも持っていこうかしら」

そう言っている物をバスケットに入れ、彼女は家を出た。

？ 母と娘（前書き）

第八話です。

? 母と娘

辺りには、ただ田畑が広がっている。

その中を、一人で歩く少女がいた。

少女はある畑の前で足を止めた。

「おかあさん！」

その畑の横に置いてある小さな長椅子、そこに背の高い、すらりとした女性が座っていた。

「ミリナ。来てくれたの？」

母は少し嬉しそうに言って、自分が座っている横をポンポンと軽くたたいた。

自分と同じ、少し赤が混ざったような茶色の髪。赤色の瞳。

自分と母は、本当によく似ていた。

「うん。おばあちゃんたち、話終わったみたいだから。」

母がたたいたところに腰をおろしながらミリナは言った。

「ほんと仲いいわよね、お義母さんとダンカン^{おんかん}さん。」

母はいつも、祖母が誰と話したなんか言わなくてもわかっているの

だ。

まあ、祖母がよく話するのはダンカンさんぐらいしかいないのだが。

ちなみにいうと、ダンカンは母の父にあたる、つまり、ミリナからすれば母方の祖父にあたる人なのだ。

だから、同じダンカンの孫にあたるランティスとは、従姉妹にあたる。

「……ねえお母さん。」

ふと、ミリナは母があのことを知っているのか疑問に思った。

「ランティスのお母さん、覚えてる？」

母が言い出すまでは言うてはいけないと思い、まわりくどい聞き方にすることにした。

「ええ。アイビスさんのことでしょ？あの人にはお世話になったわ。」

母も、祖母たちのようにお世話になったようだ。

「アイビスさんって、今どうしてるの？」

その質問に母は苦笑を浮かべた。

「おばあちゃんに聞いた方が、良いと思うわ。お母さんも、あ

まり知らないの。」

「……」

母の言葉に、ミリナは困った。これでは、知ってるのか知らないのかわからない。

「急に、どうしたの？」

母が聞いてきた。ミリナは詰まった。

「な…なんでもないの！た…ただ、気になっただけなの！」

急に叫んだ娘に、母は不思議に思った。

「やっぱり何かあるの？」

「う…ううん…ほ、ほんとになんでもないから！」

こんな返事で母が納得するとは思えなかったから、何とか誤魔化そうとバスケットを見た。

中には、ベリーパイが入っている。これだ。

「そ、それよりお母さん、ベリーパイ、持ってきたよ！」

急いで取り出し、一緒に持ってきた小皿に切り分けのせた。

母に手渡すと、母はわぁっと、嬉しそうにほほ笑んだ。

「丁度、今食べたいなって思ってたの。ありがとう。」

母はすぐに食べてしまった。よほどお腹がすいていたのだろう。

ミリナはしばらく考えていたが、やがてひらめいた。

「ね、お母さん。アイビスさんは、お母さんになにをしてくれたの？」

これなら、少しは天使とかいう単語も出てくるかもしれない。

結構自信はあったのだが、返ってきたのは、的外れな答えだった。

「え？そうねえ。一緒にご飯作ってくれたり、あなたの子守もしてくれたり…色々やってくれたわよ」

「色々…そうなんだ」

ミリナは肩から力が抜けた。

「あ、でもね、一番心に残ってるのは、結婚式ね。」

母は、懐かしそうに言った。

「結婚式？」

首をかしげた私に、母は嬉しさを秘めた眼で教えてくれた。

「そう。アイビスさんと兄さんの結婚式。」

兄さんは、ランティスのお父さんだ。フレッド、という名前でも優しい人だった。

「アイビスさんはね、自分のいたところから花嫁衣装を持ってきたんだけど、それが、ほんとに綺麗だったの。」

「どんな衣装だったの？」

「大きな翼を広げたような、真っ白な、鳥のような…そうねえ。まるで、天使のような衣装って言うといいかしらね」

母の瞳は輝きで満ちている。

だが、この口調からして母は知らないと思う。

なら、簡単には言えない。内緒にしなければ。

「でね、指輪は、兄さんが、町の職人さんと手作りで作ったそうなんだけど、指輪の外側には鳥の装飾、内側には仲のよかった二人にピットリな、羽根の装飾があつて。」

「どうして、羽根の装飾がぴったりだったの？」

どうして羽根の装飾がぴったりなのか、ミリナにはわからなかった。

「一つずつだったから、二つの指輪をを合わせると、二つになるのだから、二人いないと片方だけじゃ飛べないでしょう？」

それは、フレッドさんがアイビスさんに、天使として生きていたことを、誇りに思ってたから、忘れてほしくなかったからじ

やないのかなと、ミリナは思った。

きつと二人は、ずっと一緒に入れなかったことを知ってたんだ。それでも、一緒にいることを選んだ…

ミリナはふむ、と考えて、やがて、ひらめいた。

「お母さん、用事思い出したから、ちょっと行ってくるね！」

「え？ちよつとミリナ？？」

ミリナは、母に告げると、バスケットを持って、走り出した。

? 祖父と孫（前書き）

第九話です。

前話と題名似てます…
あんまり進展ありません

? 祖父と孫

祖父とともに家に帰ったランティスは、改めて祖父を説得していた。

「　　というわけなんだけど……」

祖父に、なるべく天使のことは隠しながら言い終えると、祖父は少し悲しげな笑みを浮かべている。

「……」

「おじいちゃん……」

いきなりこんなこと言われても、困るよね……

そう思いつつ自分の部屋に戻ろうとした時、祖父が静かな声で言うてきた。

「ランティス、待ちなさい。」

いつもは優しい祖父の冷静で冷たさを秘めた声に、少しドキリとする。

「大事な話がある。」

「な……に？」

「いいから聞きなさい。お前には知る必要がある。」

祖父は静かに、居間にある長椅子に腰かけた。

そして、ランティスにも彼の前にある長椅子に座るように促す。

ランティスが座ると、祖父は静かな声音で話し始めた。

「ランティス。お前は天使になる気か？」

ランティスは驚いた。祖父には、町で仕事する、と言ったのに。

「わかるさ。お前は嘘をつくとき、目を逸らすから。」

「あ…！」

ばれていたのだ。うっ…と、少し縮む。どうしてこう、ばればれないのか。

「…もう十何年も一緒に暮らしてきたんだ。わからないはずはないんだ。」

祖父はやはり少し寂しそうだ。

「おじいちゃん…」

ランティスをまっすぐ見て、ダンカンは続ける。

「おじいちゃんは大丈夫だ。今までずっと、お前に元気をもらってきたから。だからこれからはそれを、世界中の人々にあげるんだ。元気という幸せを。いいね？」

やっぱり寂しいのに変わりはない。だが、もう、自分だけの孫じゃないのだ。

「おじいちゃん…?」

ぐっと歯を食いしばり、涙が出てくるのを抑える。

「お前のお母さんが、そうしてきたように、お前も」

ジワリと目が潤う。何とか言葉をつなげる。

「お前も、人を、幸せにできる力があるんだ。精一杯、頑張るんだよ」

「うん！頑張るわ！ありがとう、おじいちゃん」

ランティスは、輝かしい瞳で嬉しそうに言う。これでよいのだ。

涙ぐんだダンカンに、ランティスははつとして問いただした。

「でも…どうしておじいちゃんは天使のことを知ってたの?」

しまったー…なんて、今更後悔しても遅いが、何とか誤魔化す。

「あ！そ、そんなこと言ったかなあ???き、気のせいじゃないか?」

それに、ランティスはまじめに悩む。

「え…確かに聞いたんだけど…もしかして、空耳?」

「き、きつとそうだ！そ、そ、空耳だよっ」

「ならいいんだけど」

「ほっ……」

なんとか誤魔化せたようだ。思わず安堵する。

ランティスは気づかなかつたらしく、ふとなにか思いついたらしい。

「あ、そう言えば……！」

「どっしたんだい？」

すると、ランティスは嬉しそうに言う。

「おじいちゃんが、お母さんのことを言ったの初めてだわ」

ダンカンは、少し目を見開く。

まだ小さいのに、全てを言うのには早すぎる。

悲しい思いをさせたくなかった。

そう思い、何度も何度も言いそびれてしまった。

言わないといけないとは思っていたけれど。

いつか、そんな日が来ると思っていたけれど。

そんな日は来なくていいと思ってもらいたから。

「ああ、そうだね。お前のお母さんは、良い妻であり、母であった。

」

「まあ」

ランティスは口元に手をやり少し顔を赤らめた。

「はあ…はあ…」

一方、母と別れ、一人ランティスの家を目指していたミリナは、ずっと走りっぱなしだったため足はズキズキと痛いし、髪も乱れまくっている。

「もう、ちょっと……」

呼吸をするのもだいぶつらいが、そんなことを言ってもらえるような時ではない。

なんとしても、ランティスに言わないと。

アイビスさんと、フレッドさんのことを。

早く言いたい。そして、納得してもらいたいの。走る早さはどんどん遅くなっていく。

「…はあ…ついた……」

やっとの思いで着いたランティスの家で、ミリナはこくりと喉を鳴らした。

? 祖父と孫（後書き）

第九話と、もうだいぶ書いてきてるのに、まだ天使ジークしか出てこないって…
そろそろ限界？

ランティスとミーナとジーク（前書き）

お久しぶりです。

第十話です。

注意：今回は、あんまり進展ありません。

ランティスとミーナとジーク

「すみませんっ…ダンカンさん、ランティスいますかっ？」

ミーナは、ベルを一回鳴らし、出てくるのを待たずに家に入った。

基本、ランティスの家は一日中あいている。

まあ、村の人は誰も勝手に入ることはないから大丈夫だろうが。

ランティスの家は、玄関を超えると、居間が広がっている。

その奥に台所が広がっていて、横に小さくダンカンの自室がある。

ちなみに二階には空き部屋と、ランティスの部屋がある。

「ダンカンさん…？」

居間に入るなりダンカンが長椅子に落ち込んだ様子で座っているのを見、ミーナは驚いた。

「ああ、ミーナちゃん…いらっしやい」

やっとミーナに気付いたらしいダンカンは、こっちを悲しそうに見ている。

「ダンカンさん、なにかあったんですか？」

「ランティスが…」

悲しそうな顔のまま言うダンカンに、ミリナは最後まで聞き終える前に口をはさむ。

「まさか、天使のことを…?」

「ああ。全部、知ってるみたいだった。それで、天使になるって…」

「ええ!? 天使になるって…??」

どうすれば天使になるのかわからないが、ランティスには何かあるのかもしれない。

「よくわからないけど、なるんだよ、あの子は天使に」

「…そうですか…」

そこで、ダンカンはまた、悲しそうに下を向いた。

「あの!ランティスに、話があつてきたんですけど…」

「お別れの言葉かい?今二階にいるよ。行っておいで」

「ありがとうございます」

小さく礼をしてミリナは二階に通じる階段を駆け上がっていった。

ダンカンとミリナが話している間、ランティスは自室にてジークに天使になるについて必要最低限知っておかないといけないことを教えてもらっていた。

「…という感じだ。」

と、締めくくったジークに対し、ランティスの頭にはまだ疑問が絶えなかった。

「え？全然わかんないんだけど！」

そんなランティスに、厳しい一言。

「わかんないならわかるうとしろ」

ランティスは、そんな発言に、少し困る。

「…さらっと言ってるけど、結構難しいわよ？」

困るランティスをよそに、ジークは至つてすがすがしい顔だ。

「そんなに難しくないが？今まで言ったことは天使なら子供もわかる常識だぞ」

それに、ランティスはガクツと肩が下がる。

「私、天使じゃないのよ…」

そんなランティスの言葉に、あつとしたように、ジークは付け足した。

「人間でも、賢い奴ならわかる」

それに、ランティスは今度こそ怒りを覚えた。

「ごめんなさいね。私、頭悪くて！！それ以上言つと、殴るわよ！？」

明らかに怒っているランティスに、ジークは戸惑う。

「いや、そんなつもりじゃ……」

否定の意を述べても、怒りのこもった質問が帰ってきた……

「じゃあどういつつもり？」

「えっと……」

答えに困るジークは、ふと耳を澄まして周りの様子をつかかった。

「どうかした？」

探るようなジークの様子に、ランティスも気になる。

「……足音がする……」

ぼそつと言つジークにランティスは首を傾げる。

「足音？」

「ああ。ここに向かってる」

言いかけのジークの言葉は、甲高い女の叫びで打ち消された。

「ランティス！」

「ミリナさん？」

ミリナは部屋に飛び込みながらランティスを呼んだ。

返事に、まだいなくなっていないと安堵しながらも、見た光景に思わず顔が赤くなる。

見たこともない青年が、ランティスと密着していたのだ。

物凄い近くにいなながらも、全く持って平気そうなランティスと男に、ミリナは余計に想像を広げる。

（誰だろこの人…おつきい人…もしかしてランティスと…そ、そんなわけないか！ランティスだし…でももうランティスもそんな年頃だし…）

心の中で勝手に想像を始めたミリナを、止めるようにして男が口を開いた。

「誰だ、この女？」

全身真っ黒という怪しげな格好をした青年がランティスに聞く。

それにランティスは手をこちらに向けて嬉しそうに紹介する。

「ああ、この人はね…」

ランティスが言う前に、ミリナはぺこっと頭を下げて自ら名乗った。

「ミリナです。ランティスの、従姉妹に当たります。」

「従姉妹…?」

「はい。私の母と、ランティスのお父さんは兄妹なんです。」

基本的にはあまり従姉妹ということを自分から言うことはなかったが、しょうがない。

まあ、従姉妹と言っても、あまり従姉妹らしいようなことはしていない気がする。

あくまで『友達』としてや『お隣さん』と接してきたから。

だが、ランティスに自己紹介を頼むと何を言うのかわからなくて恐ろしい。自分で言う方がいいだろう。

「…そうか」

ふむ、と頷いた彼に、こんどはミリナが聞く。

「あの、あなたは?」

「俺か?俺は…」

少し困った様子の彼の代わりに、ランティスがさっきのお返しも込めてミリナに微笑んで教える。

「ジークっていう、変態自己中馬鹿男です。」

それに、やっぱり自分で言ってよかったとミリナはうれしそうに微笑み返す。

本当に変態自己中馬鹿男なのかわからないが、ランティスの場合、基本的に想像も混じるため、事実だけの可能性は低い。

それを肯定するかのようじ。クはランティスの言葉に首を傾げた。

「俺のどこが変態で自己中で馬鹿なんだ??少なくとも俺は馬鹿じゃないが?」

それに、ランティスは何故気づかないのかと思う。

「全部よ!初めて会ったときなんか急に後ろからしゃべりかけてきたじゃない!あの時は本当にお化けだと思ったわよ…!」

さらにジ。クは首を傾げる。

「そんなことあったか?俺は覚えてない。それに俺はお化けじゃなく」

その先は言うてはいけないと、ランティスはジ。クに言おうとした。

「あつ!その先は」

ジクもはつとしたようで、言葉を止めた。が、

「天使、ですよ？ジクさんは」

第三者が、口を開いた。

「ミリナさん…？どうして？？」

ランティスが思わず聞いた。

これでは、天使と認めたことになるがランティスは構わなかった。

天使の存在を、知ってる人がいると思わなかったから、気になったのだ。

ミリナさん、どうして天使のことを

天使は、人に知られてはいけなはずなのに。

しかしミリナは続ける。

ランティスのことを、確認するかのよう。

「ランティスも、天使になるんでしょう？」

「えっ…ミリナさん…」

とまどうランティスに、ミリナは遠慮しなかった。

「私は、ずっと、ランティスと友達でいるつもりだった。一生、お

互いを助けあえるような友達でつて。
でもランティスは、天使で…。私ね、ランティスに言いたいことがあつたの。」

「言いたいこと…？ミリナさんが？」

ミリナは、こくつと頷いて、入り口に立ちっぱなしだったことを思い出して、部屋に三つある組み立て式の椅子を組み立ててランティスの座った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6966p/>

天使・ランティス

2011年5月23日14時47分発行